

鳥類の生息状況調査から考える森づくり

水野竜佑（環境学園専門学校）

【緒言】

兵庫県南部に位置する「尼崎の森中央緑地」(約 29ha)は、「地域を育てる森づくり」を基本理念に掲げ、失われた自然環境を回復・育成する活動に取り組んでいる。合わせて、大阪臨海部と内陸部の自然環境を結びつける結節点として、大阪湾一帯での自然環境の広域拠点となることを目標にしている。当地の「森づくりエリア」では県民の参画と協働による森づくりが進められており、「アマフォレストの会」をはじめとする、多くの県民、企業、団体が生物多様性に配慮した森づくりに参加している。ここでは「鳥類による種子散布型の緑化」を目指していることから、当地における鳥類の生息状況の把握を目的に調査を行ったので、そこで得られた知見を報告する。

【方法】

2015年6月30日から11月27日の間の21日間、調査ルート(130m)をゆっくり歩き、確認された鳥の種名・確認位置を調査用紙と地図に記録した。種名は目視と鳴き声により現場で同定した。

【結果と考察】

尼崎の森中央緑地の鳥類は、留鳥・冬鳥が多いのに対して、夏鳥が少ないことが分かった。これは鳥類の繁殖期である4～7月に営巣場所として利用できる環境が少ないことを示している。反対に留鳥や冬鳥が多いのは採食場所が多く、餌の調達や越冬をするには適した環境があることを示している。よって、当地に現状より多くの鳥類を誘致するには、夏鳥が繁殖できる環境を提供する必要があると思われる。例えば、コアジサシ(第4次環境省レッドリスト/絶滅危惧Ⅱ類)は、「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律(種の保存法)」において「国際希少野生動植物種」に指定されている希少な渡り鳥で、兵庫県には4～5月頃に南方から繁殖のために渡来する。営巣場所は、砂浜海岸・河川敷のほか人工的な埋立地・造成地などで、木草などが生えていない砂礫地を好むものの、現状では埋め立てや海岸付近の緑化にともない、全国的に営巣場所を奪われつつある。阪神地区では、大阪湾の人工海岸や神戸港周辺の海岸線などが本種の主要な営巣場所となっている。本調査中において、恐らくその繁殖個体群の一部が、尼崎の森中央緑地の工事中の造成地上空で確認されたことから、当地でも希少なコアジサシが営巣している可能性がある。

今後も、現状の森づくりを進め、当地全域を緑地化してしまえば、コアジサシは姿を消すことが予想される。コアジサシをはじめ、多くの夏鳥を誘致するためには、夏鳥の生息状況の把握ならびに営巣場所の確保が重要であると考えられる。

◆コアジサシについて

体長約28cmのチドリ目カモメ科の渡り鳥。ニュージーランドなどの南半球で越冬し、4～5月に日本へ繁殖のために飛来する。河原・砂浜などで集団繁殖するが、日本では東京湾・九十九里海岸・大阪湾・九州北部などの埋立地や人工海岸が大規模な繁殖地となっている。環境省レッドリスト絶滅危惧Ⅱ類、国際希少野生動植物種に指定されている。



図1. 飛翔するコアジサシが確認された場所